



山陰の古墳

改訂版

～古代ロマン探訪～



岡田山1号墳石室



長瀬高浜遺跡出土埴輪



上塩治地藏山古墳

殿山古墳



山代方墳石室内 石床



史跡整備ネットワーク会議
事務局

島根県教育庁文化財課 〒690-8502 島根県松江市殿町1番地
TEL.0852-22-5880 FAX.0852-22-5794
鳥取県地域づくり推進部文化財局 〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1丁目220
とっとり弥生の王国推進課 TEL.0857-26-7932 FAX.0857-26-8128



山陰史跡整備ネットワーク会議

検索

発行：2021年3月

史跡整備ネットワーク会議



こちらからPDF版を
ダウンロードできます。

山陰の古墳

はじめに

山陰両県の古墳は消滅したものや未確認のものを含めると18,700基を超えると推定されます。一口に古墳といってもその内容は多種多様で、地域や時期によっても細部は異なります。

ガイドブック第2巻では史跡指定された古墳や各地域で特徴的な古墳を紹介しています。本巻を片手に現地を訪れていただき、地域の歴史や古墳文化に親しんでいただければ幸いです。

古墳時代とは

3世紀後半から7世紀前半にいたる約400年間は、日本列島各地でおびたしい数の古墳が築造されたことから、古墳時代と呼ばれています。古墳は弥生時代以降の地域社会の発展を受け継いで、列島各地の首長(王)が、大和の政権(大王)と政治的な連合を結んだ結果、その証として墳墓形態などの葬送儀礼を共有した結果、生まれたものと考えられています。

古墳は周溝(濠)に囲まれ、葺石・埴輪などの外表施設を備えた土盛(墳丘)内に、石室などの埋葬施設を設け、多種多様な副葬品とともに死者を厚く埋葬した墓です。長期間にわたって造営され続けた古墳は、その形態や埋葬施設・副葬品等の変化を目安として、前期・中期・後期と終末期に区分され、地域ごとの特徴を比較することができます。

古墳のかたち

墳丘の平面形には、円墳と方墳を基本として、それを組み合わせた前方後円(方)墳や、前方部の短い帆立貝式古墳などの種類があります(図1)。さらに、墳丘を持たない横穴墓や地下式横穴なども古墳の仲間に含まれます。また、墳丘の表面はびっしりと石で覆われ(葺石)、頂部や裾部には形象埴輪や円筒埴輪などを立て並べて、古墳を壮麗に見せていました。

埋葬施設の違い

墳丘内には、遺体を納めた木棺や石棺を直接埋めたり、棺を納める埋葬施設(竪穴系)がつくられました。時代が下ると棺を安置する横穴式石室などの埋葬施設(横穴系)がつくられるようになりました。竪穴系埋葬施設が原則としてひとりの死者を埋葬するのに対して、横穴系の埋葬施設は死者を次々と追葬することが可能でした(図2)。

さまざまな副葬品

埋葬にあたっては、身につけた装飾品や日用品、あるいは埋葬儀礼に用いられた品々が、副葬品として納められています。こうした副葬品には、勾玉・管玉などの玉類や青銅製の鏡、剣や甲などの鉄製武器・武具や供物を入れた土器類など、多種多彩なものがありました。

古墳の変遷

【前期】

地域ごとの特徴がみられる弥生墳丘墓が造られなくなり、奈良県・箸墓古墳を最古とする統一的な前方後円墳が全国に出現します。山陰地方では古墳時代初め頃には方墳が造られ続け、前期後半になって東伯耆・因幡・石見で最初の方後円墳、出雲・西伯耆では前方後方墳が造営されます。

【中期】

全国的には古墳の規模がピークを迎える傾向があり、伯耆・因幡でも規模が最大となって、三大河川それぞれに全長90~110mの大型前方後円墳が出現します。出雲や隠岐地方でも前方後円墳が出現します。

【後期】

出雲地域では最大の方後円(方)墳(90m級)が造営されます。全国的に小規模古墳からなる群集墳が出現し、横穴式石室・横穴墓が普及して家族墓としての性格が強くなります。また、出雲の石棺式石室、因幡の中高式天井石室など、地域ごとの個性が顕著になります。

【終末期】

新たな前方後円墳が造られなくなり、古墳時代も終焉を迎えます。梶山古墳、山代方墳のように精緻で特殊な構造を持つ終末期古墳が限定的に造営されます。

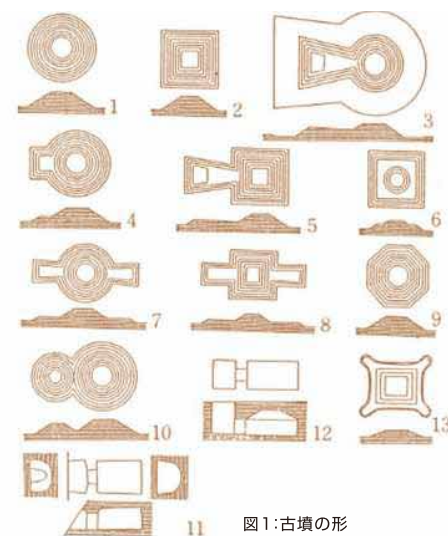


図1:古墳の形

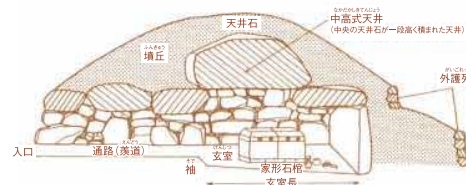


図2:横穴式石室の模式図



山代方墳石室



斜面に築かれた横穴墓群(米子市陰田横穴墓群)